る。

前に述べた如く、波斯教殘經の一部に應ずる古代トルコ文譯本の見出されたのは、自分には非常に興味の深い事實である。本書所收の第八文書の一より七までが卽ちそれである。これを見ると此のトルコ文譯の原本となつたものを漢譯本と見るべき理由は一つも存しない。ペーレヴィ文からか、或はソグド文などから譯されたものであらう。漢譯本と對比して見ると各々一長一短で、彼に誤れる所が此に正しいかと思へば、彼に存する所が此に脫した所もあるが、兎も角漢譯本の誤脫が容易に此の本によつて曉り得らるゝ如きものある丈けでも、此の本の價値は充分に認めることが出來やう。一二の例を擧げて見ると、漢譯本に

又惠明使於魔暗身、通顯三大光明惠日、降伏二種無明暗夜、像彼無上光明記驗

と記し、續いて第一日第二日と順次說明し、次に

第三日者卽是說聽及喚應聲、十二時者卽最微妙相心念思意等及與怜愍誠信具足忍辱智惠等是、其此喚應第四日者以像大界日光明使、怜愍相等十二時者卽像日宮十二化女、光明圓滿、合成一日（op. cit. 106-105〔602-601〕）

と見える。文中「其此喚應第四日者」の一句は、此の一節が前記の三大光明惠日の說明である點から見ても、到底其の儘には解釋し難く、何等か誤りの存すべきことは何人も疑はない處である。茲に於てシャヴンヌ、ペリオ兩氏は之を「其此說聽及喚應者」の誤りであろうと見た（op. cit. 71〔567〕）。然るにこの第八文書の三には丁度之に相當する處が出て居つて、著者の譯によると、

1. seine Glieder (?) ……sind diese: (1) die Seele, (2) der Verstand,